

# 富岡重憲コレクション『大般若経』巻第270（東大寺八幡経） について

下野 玲子

## はじめに

当館の富岡重憲コレクション（旧富岡美術館の所蔵品）には、鎌倉時代前期を代表する写経の一つ「東大寺八幡経」の残巻である『大般若経』巻第270（蔵品番号：書B-2）が収蔵されている。

東大寺八幡宮は現在の手向山八幡で、東大寺の鎮守として天平勝宝元年（749）に勧請されたが、当初の位置は定かでない<sup>（註1）</sup>。その後は中門前南東の鏡池の東にあったが、治承4年（1180）12月の平重衡による南都焼き討ちで、東大寺の諸堂と共に焼失した。鎌倉時代に入り、重源の尽力によって大仏殿をはじめ東大寺の伽藍が復興され始めると、八幡宮も文治4年（1188）5月に造営、御神体造立のことを奏聞し、建久8年（1197）2月には重源の沙汰によって八幡宮上棟がおこなわれた（『東大寺八幡験記』<sup>（註2）</sup>）。また御神体として、現在国宝に指定されている快慶作僧形八幡神像の開眼供養が建仁元年（1201）になされている（同像銘文<sup>（註3）</sup>）。しかし、八幡宮造営についてはその後一時中断され、嘉禎3年（1237）11月になって千手院岡（現在地）に移して再開され、間もなく上棟となった（『東大寺八幡験記』『東大寺別当次第』）。なお、再建された大仏の開眼供養は文治元年（1185）<sup>（註4）</sup>、大仏殿の供養は建久6年（1195）におこなわれている<sup>（註5）</sup>。

東大寺八幡経は、このような鎌倉期の東大寺再興事業のさなか、嘉禄2年（1226）に比丘尼成阿弥陀仏が発願し、多くの民衆の勧進と僧侶の分担執筆を得て完成し、八幡宮に奉納された玄奘訳『大般若経』600巻であった。八幡宮は江戸時代初期に火災によって再度焼失し、現在の本殿は元禄4年（1691）に再建されているが、經典は江戸時代までは当社に伝わっていたようである。しかし明治の神仏分離の際に八幡宮が東大寺から独立すると民間に流出し、現在では奈良国立博物館や京都国立博物館ほか、私立美術館、寺院などに分散している。例えば奈良国立博物館所蔵の巻148については西山厚氏による解説に、「昭和13年（1938）の時点では「東大寺八幡宮経」のうち312巻（鎌倉当初のものは240巻）が西大寺の佐伯悟龍師のもとにあり、本巻はその内に含まれていた。神仏分離の際に八幡宮から出たものを、佐伯弘澄師（佐伯悟龍師の先師）が買取ったのだという」とある<sup>（註6）</sup>。

富岡重憲氏（1896～1979）が東大寺八幡経巻270を購入した時期はわかっていない。

## 1. 作品の概要

本作品の寸法、状態は以下の通りである。図1は見返しから巻頭にかけて、図2は表紙と紙背の一部である。

名称：大般若経巻270

制作年代：鎌倉時代、安貞2年（1228）書写奥書

材質・形状：紙本墨書、卷子装

寸法：縦26.5cm、横891.2cm〔見返し〕横19.0cm、総長910.2cm〔界〕高さ20.15cm、幅1.9～2.0cm

料紙は楮の樹皮繊維を漉いた楮紙を黄檗で染めたもので黄色を呈している。表紙は光沢のある濃い紺紙に金銀

箔砂子を撒き、見返しは白地に小さな銀の切箔を散らしている。軸は先端に向かって徐々に広がる撥型で鍍金されている。巻頭右下と紙背継ぎ目には「東大寺八幡宮」の黒印が捺されている。これらの装飾と押印は東大寺八幡經に共通するものである。外題には二重枠内に「大般若經卷第二百七十」と金泥書きされている。界線は薄墨で引かれ、一行17字、一紙20行で、ところどころ誤字の上から胡粉を塗り訂正してある。東大寺八幡經には多くの書写奥書があることが知られているが、本巻にも以下の通り巻末に書写奥書があり（図3）、紙背の表紙のすぐ右側にも墨書がある（図2参照）。

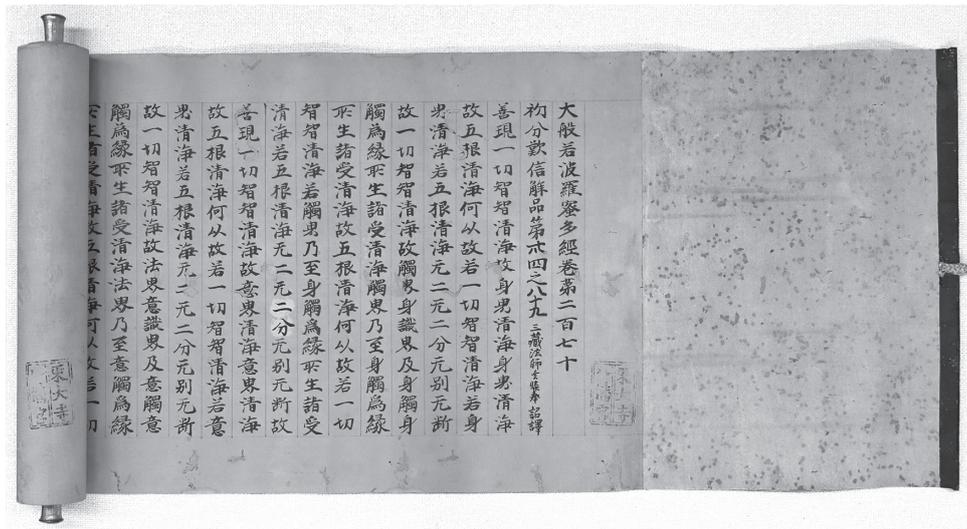


図1 『大般若經』卷第270 見返しおよび巻頭

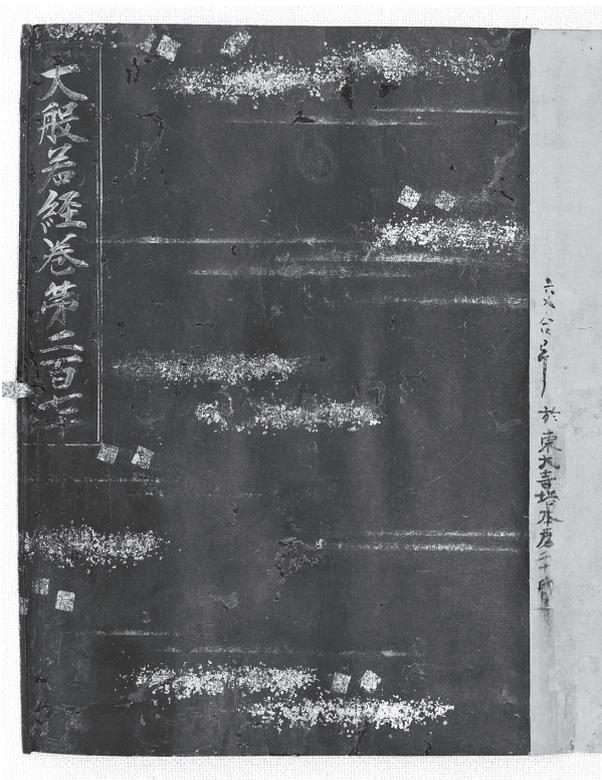


図2 『大般若經』卷第270 表紙と紙背の一部

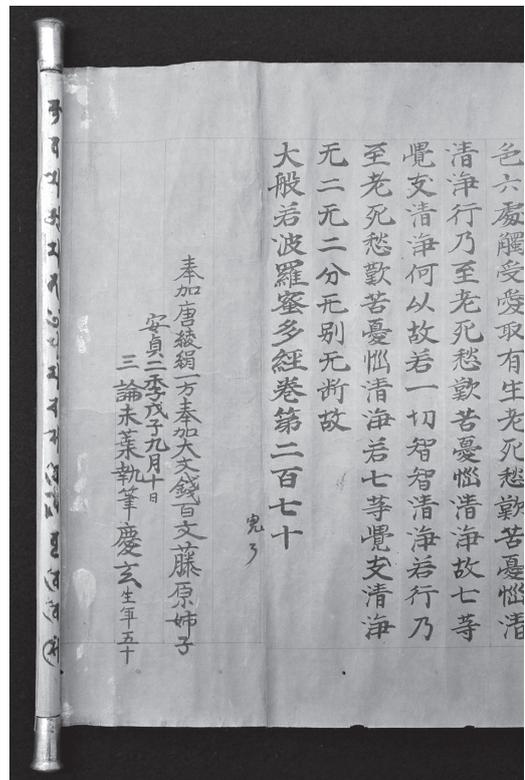


図3 『大般若經』卷第270 奥書と軸木

〔卷末墨書〕

完了

奉加唐綾絹一方 奉加大文錢百文 藤原姉子

安貞二季戊子九月十日

三論末葉執筆 慶玄 生年五十

〔紙背墨書〕 交合早\* 於東大寺塔本房二十紙□

(筆者註) ※は畢の異体字

さらに軸木には梵字17字が墨書されているが、これは他の東大寺八幡経に報告されているものとなないもの、軸木について言及されていないものがあり、すべてに施されていたものかどうかは今後の調査を待たねばならない。梵字の解読と尊名比定については大正大学の佐々木大樹先生に全面的にご協力いただき、17字のうち16字は十二神将と四天王からなる十六善神の種子であることが判明した。十六善神や十二神将の名称には諸説あるが、十六善神は『大般若経』の守護神であり、本写経を守護するために書かれたとみなすのが妥当であろう。図4に示したローマナイズ・推定梵語・尊名はすべて佐々木先生のご教示によるものである。この場を借りて感謝申し上げたい。

	①ku	kum̐bhīra	くびらたいしょう 宮毘羅大将
	②va	vajra	ばさら 伐折羅大将
	③me	mekhira(mihira)	めきら 迷企羅大将
	④a	aṇḍira	あにら 頰爾羅大将
	⑤ma	majira	まびら 摩尾嚙大将
	⑥ta? (śa ऩ )	śaṇḍhira	さんちら 珊底羅大将
	⑦i	indra	いんだら 因達羅大将
	⑧pa	pajra	はいら 波夷羅大将
	⑨ma	makura	まこら 摩虎羅大将
	⑩ca (ci ञ )	cindhūra(sindhūra)	しんだら 真達羅大将
	⑪so (co? ञ )	catura	しょうとら 招杜羅大将
	⑫vi	vikala	びから 尾羯羅大将
	⑬vai	vaiśravaṇa	たもんでん 多聞天
	⑭br̐ (dhṛ ṛ )	dhṛtarāṣṭra	じこくてん 持国天
	⑮vi	virūḍhaka	ぞうちょうてん 增長天
	⑯vi	virūpākṣa	こうもくてん 広目天
	⑰ṣiṃ	?	不明

図4 『大般若経』巻第270 軸木梵字とローマナイズ、尊名

## 2. 卷第270奥書について——他巻の書写年月と比較して——

最初に述べたように東大寺八幡經の遺巻は諸処に散在している。筆者はそれらを網羅しているとは到底いえないが、参考までに出版物などで書写年月と筆者が確認できたものについて、巻次・書写年月日・筆者・出典（または所蔵者）を巻数順に列挙してみたい。なお、東大寺八幡經は書写年のほかに経蔵造営のために金銭や花瓶などの奉加・施入とその人名、紀年を有するものがあるが、ここでは書写年代を明確にするため、書写年が不明のもの、紀年はあるが奉加の年と考えられるものは除外した<sup>(註7)</sup>。ただし、省略した部分を含めて富岡コレクションの巻第270の奥書と同じ人物名が含まれるものに※印を付した。これについては後述する。

①巻第1	嘉禄2年(1226)4月25日	大法師秀恵	『日本古写経現存目録』(佐伯悟竜氏蔵) <sup>(註8)</sup>
②巻第5	嘉禄3年(1227)6月1日	大法師秀恵	『日本古写経現存目録』(竜門文庫蔵)
③巻第8	嘉禄2年(1226)6月17日	大法師秀恵	『日本古写経現存目録』
④巻第9	嘉禄2年(1226)6月17日	大法師秀恵	『日本古写経現存目録』
⑤巻第40	貞永元年(1232)10月6日		『日本古写経現存目録』
⑥巻第52	寛喜2年(1230)4月15日	比丘妙阿弥陀仏	『日本古写経現存目録』
⑦巻第56	貞永元年(1232)10月27日	僧蓮禎	『日本古写経現存目録』 ※
⑧巻第75	安貞元年(1227)4月15日	常熙	『日本古写経現存目録』(中川貞繁氏蔵)
⑨巻第100	安貞2年(1228)2月12日	三論末葉執筆盛真	『日本古写経現存目録』 ※
⑩巻第139	寛喜元年(1229)6月5日	僧定信	『日本古写経現存目録』 ※
	※奉施入花瓶一对 藤原姉子/貞永元年(1232)10月21日		
⑪巻第162	寛喜元年(1229)6月14日	奉加・・・比丘尼念阿弥陀仏	
	奉施入東大寺八幡宮大般若經中内十帙書写畢僧定雄		『日本古写経現存目録』
⑫巻第202	寛喜元年(1229)	奥書の詳細不明	根津美術館蔵 <sup>(註9)</sup>
⑬巻第265	安貞2年(1228)4月22日	三論末葉沙門乗信	唐招提寺蔵 <sup>(註10)</sup>
⑭巻第341	安貞2年(1228)2月25日	筆師僧良覚	『日本古写経現存目録』(反町氏蔵)
⑮巻第379	寛喜元年(1229)	奥書の詳細不明	九州国立博物館 <sup>(註11)</sup>
⑯巻第425	安貞2年(1228)2月上旬	理阿弥陀仏	『日本古写経現存目録』(岩島文庫蔵)
⑰巻第428	安貞2年(1228)2月上旬	理阿弥陀仏	『日本古写経現存目録』(岩島文庫蔵)
⑱巻第430	寛喜元年(1229)6月1日	理阿弥陀仏	東京国立博物館 <sup>(註12)</sup>
⑲巻第456	安貞2年(1228)5月上旬	理阿弥陀仏	佐橋鐵太郎氏蔵 <sup>(註13)</sup>
⑳巻第531	嘉禄3年(1227)5月10日	三論宗末葉沙門乗信	京都国立博物館蔵(守屋コレクション) <sup>(註14)</sup>
㉑巻第532	安貞2年(1228)2月25日	三論宗末葉沙門乗信	『日本古写経現存目録』
㉒巻第533	安貞3年(1229)3月11日	大法師乗信	『日本古写経現存目録』(中川貞繁氏蔵)
㉓巻第600	安貞2年(1228)5月29日	三論宗末葉盛真	『日本古写経現存目録』(内藤湖南氏蔵)

以上、巻数順に並べてみたが、複数人で600巻の書写を分担しているため、巻次の順が書写された順にはなっていない。ただし筆者については、東大寺八幡經の奥書を集めた田中塊堂氏によれば、巻1～10は秀恵、巻11～100は盛真、巻101～200は定雄が書写しており、以下600巻までの筆者として慶玄、榮源、理阿弥陀仏、良覚、欣蓮、

重深、盛真の名が出てくるといい<sup>(註15)</sup>、巻次である程度の分担を決めたように見受けられる。また、上記のうち⑩～⑫、⑮の寛喜元年（1229）、⑥寛喜2年（1230）、⑤⑦貞永元年（1232）は書写の年紀でない可能性もあるが、⑮の寛喜元年奥書では暦の他は「理阿弥陀仏記之（花押?）」とのみ記され、奉加・施入については触れていないため、寛喜元年に書写されたとみなしてよいだろう。

※印を付けた巻には、巻第270奥書と同じく、「藤原姉子」という人物が何らかの奉加（寄進）をおこなったことが記されている。巻第270の場合は唐綾絹一方と大文銭百文だが、他にも⑦巻第56、⑨巻第100、⑩巻第139にもその名が見え、⑦では父母の尊霊のために提（丁、仕丁のこと）一口の施入、⑨では銭百文と大文銭百文を奉加している。一人が数回にわたって同じ仏事に寄進をしていることがわかる。

### 3. 東大寺八幡経書写事業の目的

東大寺八幡経の発願目的についてもっとも事情がわかるのは、巻第1と巻第100の奥書であるため、それを『日本古写経現存目録』から以下に引用する（句読点は筆者による）<sup>(註16)</sup>。

#### 巻第1奥書

比丘尼成阿弥陀仏、此御経勸進之根源、殊以嚴重、隨喜無限。仍勵老眼、敬奉書写始之处也。

嘉祿二年丙戌四月廿五日己酉、於東大寺塔本房、

第一卷書写了。大法師秀惠 春秋八十七。

〔訓読〕比丘尼成阿弥陀仏、此の御経の勸進の根源、殊に以て嚴重し、隨喜すること無限なり。仍て老眼を勵まし、敬いて書写し奉ることこれを始むる処なり。

嘉祿二年丙戌四月廿五日己酉、東大寺塔本房において、第一卷を書写し了んぬ。大法師秀惠 春秋八十七。

これによれば、成阿弥陀仏がこの經典の勸進を行うことを決意し、東大寺塔本房において書写が始められたことがわかる。東大寺の東塔・西塔再建は重源によって企図されたがその生前には果たせず、建保4年（1216）に行勇によって東塔の造営が再開され、貞応2年（1223）に完成している<sup>(註17)</sup>。塔本房はおそらくこの再建されて3年目の東塔にあった房と考えられる。

#### 巻第100奥書

南閻浮提大日本大和国、東大寺鎮守八幡宮奉納大般若経一部之内、自初百之二帙至十帙、又三百内七帙百軸。右、殊抽精誠、備香花、并持十善戒、礼時懺法、无退転、所奉書写既百卷也。先捧書写惠業、大伽藍安穩、興隆仏法、広作仏事、利益人天、兼八幡大菩薩増法楽、副威光而已。上天長地久、四海大平矣。仏子願者、大梵天王高閣、釈提桓因頗梨壁、琰魔王鏡面、五道大神秤量、泰山府君簡前、俱生神筆端、必納受百冊書写、功永離二十五有生处、欲生安養兜率、隨縁浄土、乃至一紙半錢、隨喜結縁之輩、皆受生一國、開悟一所、生生為知識、世世為好伴、父母師長、乃至法界順違、無遮平等。敬白、願以書写、普及一切、我等一切皆共成仏。

南無生生世世、值遇頂戴、大般妙果。

安貞二年戊子二月十二日 三論末葉執筆 盛真 生年四十八

〔訓読〕南閻浮提大日本大和国、東大寺鎮守八幡宮奉納大般若経一部のうち、初百の二帙より十帙に至り、また三百のうち七帙百軸。

右、殊に精誠を抜き、香花を備え、并せて十善戒を持し、礼時懺法、退転することなく、書写し奉ると

ころ既に百卷なり。先に捧げたる書写惠業、大伽藍安穩にして、仏法を興隆し、広く仏事を作し、人天を利益し、兼ねて八幡大菩薩の法樂を増し、威光を副えるのみ。上は天長地久、四海大平たり。仏子願わくは、大梵天王の高閣、釈提桓因の頗梨壁（壁の誤字か）、琰魔大王の鏡面、五道大神の秤量、泰山府君の簡前、俱生神の筆端、必ずや百艸書写を納受し、功は永く二十五有の生處を離れ、安養・兜率に生まれんと欲し、浄土に随縁し、乃ち一紙半錢に至るまで、随喜結縁の輩、皆一国に受生し、一所に開悟し、生生知識となり、世世好伴となり、父母師長、乃至法界順違にして、無遮平等ならんことを。敬いて白す、願わくは書写を以て、普く一切に及ぼし、我等と一切皆共に成仏せんことを。南無生生世世、値遇頂戴、大般妙果。

安貞二年戊子二月十二日 三論末葉執筆 盛真 生年四十八

ここには書写が巻100に至った節目として改めて願文を述べていると考えられ、当時諸堂の再建が進み全容が整いつつあった東大寺の大伽藍が安穩となり、仏法が興隆して広く人や天を利益し、八幡大菩薩の法樂となること、天下太平を祈っている。また梵天王の宮殿・帝釈の宝珠や冥界の裁判官である閻魔大王の業鏡、五道転輪王の秤、泰山府君の簡、俱生神の筆といった冥府で生前の行いを量る宝物などを引き合いに出し、この經典の書写や寄進に加わり縁を結んだ人々の後生を願っている。

## むすびにかえて

ところで、東大寺八幡經の書写年代はおよそ嘉祿2年（1226）から安貞2年（1228）とされているが、前章でみてきた奥書から、下限はこれより1年先の寛喜元年（1229）まで下げてもよいのではと思われる。いずれにせよ、『東大寺統集録』巻3の記述によれば、八幡宮では寛喜4年（1232）3月23日に大般若会が開始され、その折比丘尼成阿弥陀仏発願の『大般若經』一部600巻が奉納されたことが夙に佐橋鐵太郎氏によって指摘されている<sup>(註18)</sup>。

### 八幡宮大般若會事

去寛喜四年三月廿三日、於八幡宮始行之、尼成阿、且仰神託、且憑法力、勸十方四部之智識、寫一十六會之眞文、即飭三所之社壇、展一日之法會、于時導師法印頼惠、請僧六十口、…（中略）…

菩薩尼成阿彌陀佛敬白

奉建立大般若臺一字 奉安置白檀釋迦牟尼如來像一體

黄紙墨字大般若經一部六百卷〈每軸奉籠佛／舍利各一粒〉

同摩訶般若波羅蜜多心經一卷 紺紙金字妙法蓮華經一部八卷

無量義經一卷 觀普賢經一卷 金光明最勝王經一部十卷

臺扉奉圖繪十六善神像各一體<sup>(註19)</sup>

いうまでもなく、このうちの「黄紙墨字大般若經」が東大寺八幡經に相当し、それが白檀の釈迦像や他の經典と共に奉納されたことはよく言及されてきたが、特筆されるのは軸毎に仏舍利一粒を籠めたこと、「大般若台」を建立してその扉に十六善神像を描いたことである。仏舍利一粒については現存を確認されていないが、重源の仏舍利信仰の影響を受けたとも考えられる。また、厨子扉に十六善神を描画することは珍しくないが、本經の軸木に十六善神を示す梵字が墨書されていることと考え合わせると、鎌倉当初にいかにも『大般若經』と釈迦十六善神の信仰が流行していたかを知る一例といえよう。梵字17字の最後の1字「sim」については現在のところ根拠を挙げて主張

できるだけ尊格候補がなく、これについては今後の課題としたい。

#### 註

- (1) 『続日本紀』天平勝宝元年12月27日条によれば、同月18日に宇佐から八幡神を平群郡に迎えさせ、27日京に入り、宮南の梨原宮に新殿を造って神宮としたというが、梨原宮の位置については諸説ありはっきりしないようである。
- (2) 『東大寺八幡験記』は永仁2年（1294）7月13日に八幡宮神輿を奉じて東大寺衆徒入浴強訴の直後になったものとみられ、『続群書類従』巻64、神祇部64に収録されている。
- (3) 『東大寺』3（奈良六大寺大観14）、岩波書店、1972年、解説18～23頁参照。
- (4) 『玉葉』文治元年8月28日条、『東大寺統要録』供養篇本（筒井寛秀監修、国書刊行会、2013年）による。
- (5) 『吾妻鏡』および『玉葉』建久6年3月12日条、『東大寺統要録』供養篇末による。
- (6) 奈良国立博物館編『奈良国立博物館の名宝：一世紀の軌跡』特別展図録、奈良国立博物館、1997年。
- (7) 本稿では田中塊堂編『日本古写経現存目録』思文閣、1973年、231～235頁に列挙されている東大寺八幡経奥書を参照した。それによれば、当該書だけで巻数は合計29に及ぶ。本文に挙げたものの他、管見の限りでは奈良国立博物館に巻第148と巻第157、センチュリー・ミュージアムに巻第29と巻第67が所蔵されているが、奉加・施入についての奥書しかないためここでは取り上げなかった。両館の奥書情報については、前掲註6のほか、以下のウェブサイトによった。  
奈良国立博物館収蔵品データベース <https://www.narahaku.go.jp/collection/>  
センチュリー・ミュージアム収蔵品データベース  
[http://www.ccf.or.jp/jp/04collection/search.cfm?category\\_no=1](http://www.ccf.or.jp/jp/04collection/search.cfm?category_no=1)
- (8) 田中塊堂編『日本古写経現存目録』思文閣、1973年、231～235頁によるが、所蔵者情報は当該書掲載のもので、現所蔵者については未確認である。
- (9) 根津美術館編『植村和堂コレクション古写経』根津美術館、1994年、図版90の解説による。
- (10) 森本孝順『唐招提寺古写経選』中央公論美術出版、1975年、51～52頁。唐招提寺には巻第382も所蔵されているが書写日時や筆者を示す奥書はないという。
- (11) 収蔵品番号 B34、九州国立博物館収蔵品データベースより。<https://collection.kyuhaku.jp/advanced/10142.html>
- (12) 東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録：古写経篇』東京国立博物館、2011年、44頁・222頁。
- (13) 佐橋鐵太郎「家蔵東大寺八幡宮経と林丘寺観音像」『歴史と国文学』第14巻第5号、1936年5月、2～14頁。
- (14) 京都国立博物館編『古写経：聖なる文字の世界』京都国立博物館、2004年、図版139。
- (15) 田中塊堂編『日本古写経現存目録』思文閣、1973年、232頁下段による。
- (16) 巻第1は前掲註15の231頁、巻第100は同232頁。
- (17) 浅井和春・浅井京子『東大寺Ⅱ〔中世以降〕』（日本の古寺美術7）保育社、85～90頁および巻末年表参照。
- (18) 前掲註13参照。『東大寺雑集録』は江戸時代初期の東大寺僧実祐の記録だが、鎌倉時代の『東大寺統要録』諸会篇本にも同様の記述がある。
- (19) 『大日本仏教全書』121、東大寺叢書1、仏書刊行会、1915年に収録。

